



(医)潤心会理事長(岩手県)

鈴木千枝子 ③

「もう時効だと思つたので書くが、私がたばこを覚えたのは高3の時だった。私の実家は小さな洋装店で、姉が家業を継ぐべく東京の服飾短大に入学した。卒業後、変な都会人になって帰ってきた姉に愕然とした父は、娘は地元で置く」と決め、私はそ

の煽りをもちに食らった。父が私に出した選択肢は、大学なら岩手医大か岩手大、落ちたら岩手県職員だった。当時の私は二校の違いも分からず、取りあえず見学に行ってみた。そして、歯学部付属病院でさっそうと働く女医を見て、これになろうと決

テラン公務員になっていたと思う。そんなイチカバチかのストレスの中でたばこを覚えたのだ。それから35年吸い続け、立派なヘビースモーカーになり、「きつと私は肺がんになって、死の床で死ぬほど後悔するんだろうな」と平はあきらめていたころ、

私はこれで……

めた。

その日から勉強は理系科目のみ。そんな調子だから国立の岩手大に受かるわけがない。したがって私の滑り止めは県職初級公務員試験となり、そっちは合格した。そして、いよいよ大学受験。一発勝負だった。もし岩手医大に落ちていたら、私は今ごろベ

夜中に咳が止まらなくなった。

「喘息？」なわけはないが、一応喘息かも……と、母校の呼吸器科で診察を受けた。

「イライラするから、吸うんです。たばこが大好きです！」と言いつつ、医師は「それじゃ、イライラしたら舐めてね」と精神安定剤の舌下薬をくれた。「そ

うか！イライラしたらこれを舐めればいいんだな」、病院の帰り道に吸ったたばこが最後の服になった。

舌下薬を一錠舐めてみた。無味。まあイライラしたら舐めればいいやと平日吸わず、翌朝。半日も我慢したんだから今吸ったらもったいない。イライラしたらこのお薬を舐めれば……を繰り返して、現在に至っている。

やればできるのである。が、その当時、院内では、「もう先生！イライラするなら、あっちでたばこ吸ってきてください!!」。「ちよつと、私の健康と君たちの身の安全とどっちが大事なの?」「もちろん私たちの身の安全です!」。今じゃ懐かしい思い出である。